

「族塩」について

高 橋 庸 一 郎

I

いわゆる唐人小説の一つで、中国では早くに失われ、日本にのみ伝えられた『遊仙窟』の作者である張文成が残した作品に『朝野僉載』がある。此の書は『唐人説薈』や『説郛』『唐人叢書』等に部分的に取られているが、中華書局の『唐宋史料筆記叢刊』には最も多くの話説を集めた『朝野僉載』がおさめられている。その第38話に次のような話がある。

麟徳已来、百姓飲酒唱歌、曲終而不尽者号為「族塩」。後閻知微從突厥領賊破、趙、定。後知微来、則天大怒、磔於西市。命百官射之、河内王武懿宗去七步、射三発、皆不中、其怯懦也如此。知微身上箭如蝟毛、剉其骨肉、夷其九族、疎親及不相識者皆斬之。小兒年七八歳、驅抱向西市、百姓哀之、擲餅果与者、相争奪以為戲笑。監刑御史不忍害、奏舍之。其「族塩」之言、於斯応也。

（麟徳已来、百姓酒を飲み歌を歌い、曲終わっても尽きざる者を号して「族塩」と為す。後ち閻知微突厥に従い賊を領して趙、定を破る。後ち知微来たり、則天大いに怒り、西の市に磔にす。百官に命じて之を射さしめるに、河内王武懿宗七歩去りて、射ること三発、皆あたらず、其の怯懦するや此の如し。知微身の上の箭蝟の如し、其の骨肉を剉り、其の九族を夷し、疎親及び相い識らざる者も皆之をきる。小兒の年七八歳なる者、驅しり抱かれて西の市に向かう、百姓之を哀れみて、餅果を擲げ与うれば、相い争い奪いて以て戲笑を為す。監刑御史害するに

忍びず、奏して之を舍く。其の「族塩」の言、斯に応ず也。）

此の意味は次のようである。

麟徳（則天武后時代の年号）の頃から、一般庶民が酒を飲み歌を歌って、其の曲が終わってもまだ余韻が残り、自分の歌詞を歌いつづけるのを「族塩」と云った。豹韜衛將軍の閻知微が和親の為に突厥に使いしたが、捕らえられやむなく唐を裏切って、突厥の軍隊とともに、唐の領地である趙、定を攻め之を破った。後に知微は唐朝廷に捕虜として返されたのであるが、その事に依り則天武后の激怒をかって、西市で磔の刑に処せられた。武后は百官に命じて矢を射させたが、河内王の武懿宗は七歩下がって三発射したが、みんなはずれて当たらなかった。それほど知微を恐れていたのがであった。しかし遂に知微の軀はハリネズミのように矢が突き刺さり、其の骨矢肉までも斬りきざまれて、其の一族すべてが皆殺しにされ、知微と親しい者も疎なる者も互いに面識の無い者までも総て斬り殺されたのであった。その中で七八歳の子供らも抱かれて西市に向かって連れて行かれたが、それを見て哀れに思った人々が、子供らに餅や果物を投げ与えてやると、子供たちは互いに争い奪い合ってふざけて笑いあっていた。刑を執行する役人もそれを見て殺すにしのびず、お上に願い出てそのままにして殺さなかった。この場合の「族塩」と言う言葉は、こうした逸話の意味に合致しているのである。

「族塩」と言う言葉がなぜ此の閻知微に関わ

る話に応じているのか。それがここで明らかにしたい問題である。

II

此の話の冒頭部分は実は『唐書・五行志』の「武后時，民飲酒謳歌，曲終而不尽者，謂之『族塩』」（武后の時，民酒を飲み歌を謳い，曲終わりで尽きざる者，之を「族塩」と謂う）」とあるのと一致する。

現在の所，管見では「族塩」の語が見えるのは文獻的には上記二例のみである。しかし此の二つは，同文に現れているから，出所は恐らく一つであると考えてよいであろう。

そこで先ずここに言う「族塩」の「塩」とは何であるかを知る為に，宋の洪邁の手になる『容齋隨筆』の「昔昔塩」と題する一文を挙げてみると次のようである。

薛道衡以「空梁落燕泥」之句，為隋煬帝所嫉。考其詩名昔昔塩，——玄怪錄載「蓬篠三娘工唱阿鵲塩」，又有突厥塩，白鵲塩，黃帝塩，神雀塩，疎勒塩，滿座塩，歸國塩。唐詩「媚賴吳娘唱是塩」，「更奏新聲刮骨塩」。然則歌詩謂之「塩」者，如吟，行，曲，引之類云。今南岳廟獻神樂曲，有黃帝塩，而俗伝以為「皇帝炎」，長沙志從而書之，蓋不考也。韋穀編唐才調詩，以趙詩為劉長卿，而題為別宕子怨，誤矣。

（薛道衡は「空梁燕泥を落とす」の句を以て隋煬帝の嫉する所となる。其の詩の名を考うるに昔昔塩なり——玄怪錄に「蓬篠三娘たくみに阿鵲塩を唱う」，又突厥塩，皇帝塩，白鵲塩，神雀塩，疎勒塩，滿座塩，歸國塩，有り。唐詩に「媚賴なる吳の娘唱うは是れ塩」，「更に新聲刮骨塩を奏す」とある。然れば則ち歌詩は之を「塩」と謂うは，吟，行，曲，引の如きの類を云う。今南岳廟神樂曲を獻するに，黃帝塩有るも，俗に伝えて以て「皇帝炎」と為し，長沙志は従いて之を書すは，蓋し考えざるなり。韋穀唐才調詩を編するに，趙の詩を以て劉長卿と為し，而るに題して別宕子怨と為すは，誤りなり。）

此の記述によると，玄怪錄には，「——塩」と称される歌詩がいろいろ有るが，唐詩に書かれた表現などから考えて，「塩」というのは，吟，行，曲，引等と言うのと同じで，「黃帝塩」を「皇帝炎」としたり，歌詩の題に「——塩」とすべき所を「別宕子怨」等とするのは間違いであるというのである。つまり「塩」とは古楽府の題に見える「飲馬長城窟行」，魏の武帝「短歌行」等に使われている「行」，或いは曹子建の「美女篇」，「白馬篇」等の「篇」，或いはまた劉廷芝の「白頭吟」，李白の「江上吟」等の「吟」と同じ意味であるということになるであろう。同じ『朝野僉載』の第267話に「王沂者，平生不解弦管。忽旦睡，至夜乃寤，索琵琶弦之，成数曲，一名雀啁蛇，一名胡王調，一名胡瓜苑。（王沂なる者，平生弦管を解せず。忽ちまち旦睡り，夜に至りて寤め，琵琶を求めて之を弦く，数曲を成す，一名雀啁蛇，一名胡王調，一名胡瓜苑。）」とあり，此の場合の「苑」も「塩」とは現代音上の違いはあるが，「胡王」や「胡瓜」等の語から考えて，本来「胡瓜塩」とされるべきものであるかもしれない。それでは何故「塩」なのか，については様々な推測が成り立つ。其の一つは「燕楽」の「燕」との関係である。「周礼・春官」に「凡祭祀饗食奏燕楽（凡そ祭祀饗食には燕楽を奏す）」とあり「燕楽」の語は非常に古くから使われていた語であるということがわかる。「儀礼・既夕礼」に「無祭器有燕乐器（祭器無きも，燕楽器有り）」と有り，其の注に「与賓客燕飲用樂之器（賓客と燕飲するに樂之器を用う）」とある。伝世の経籍に現れる春秋戦国期の国の名としての「燕」は金文では総て「匱」或いは「鄣」である。言うことは「燕楽」は恐らく「宴楽」の意味を持つ語であろうとおもわれる。よって後に「燕楽」は「譙楽」とも「醺楽」とも表記されるのである。しかし「燕楽」はもともと室内楽であった。「周礼・春官」に「教縵樂燕楽之鐘磬」と有り，其の鄭玄の注に「燕楽，房内樂也，所謂陰聲，金石備矣（燕楽は房内の樂なり。いわゆる陰聲にして，金石備うなり）」とある。

これで見ると燕楽は房内でしかも絃楽器、管楽器以外に必ず金石楽器が備わっていたというのである。鐘は編鐘でかなり大がかりな虞を備えた架によって支えられたもので、また磬もいわゆる編磬で、1978年湖北省随県の曾公乙墓から発掘された編磬は、高さ1.09、幅2.15メートルもあり、これらは宮廷の室内に備え付けられるものである。此の点では、「塩」が「百姓」に歌われ、「媚賴呉娘」に歌われると言うのとは、其の楽器及び其の音楽の享受される層が全く異なっていると言える。「塩」の意味するものについて今一つ考えられるのは、「塩」を冠する曲の特徴である。例えば「昔昔塩」について言うならば、此の詩の後半に、「前年過代北、今歳往遼西」と有り、代北は代州のことで、現在の太原の北にあたり、随朝では東突厥に近いところである。また遼西は現在の遼寧省でやはり随朝では契丹の支配下にあった辺域である。更に容齋が挙げている曲名には「突厥塩」「疎勒塩」等の異域の名がつけられている。恐らく「塩」は西域、北域から伝来して、民間に流行した楽曲を指したものと想像される。それによってか、「燕楽」の語そのものにも、随唐の俗楽と言う意味もあり、『唐書・礼楽志』に「自周陳以上、雅鄭淆雜而無別、随文帝始分雅俗二部、至唐更曰部当、凡所謂俗樂者、二十有八調、燕設用之（周陳自り以上、雅鄭淆雜して別無し、随の文帝始めて雅俗二部を分け、唐に至りて更に部当と曰う、凡そいわゆる俗樂は、二十八調で、燕設けるに之を用う）とあり、また清の凌廷堪の著した『燕楽考源』には、「燕楽之源、據随書音楽志出於龜茲琵琶（燕楽の源は、随書音楽志に據り、龜茲の琵琶より出ず）とある。此の点から考えると「塩」というのは龜茲の楽器の名か、楽曲に関する語の音訳かもしれない。しかし「燕楽」の語そのものは漢代から存在していたと言うことは既に見てきた通りであるから、凌廷堪の謂う燕楽は俗楽と言う意味での燕楽と言うことであろう。

Ⅲ

随唐を通じて西域の樂が盛んであったと言うことは史書に詳しい。『旧唐書・音楽志』に「自周、随已来、管弦雜曲將数百曲、多用西涼樂、鼓舞曲多用龜茲樂、其曲度皆時俗所知也。（周、随自り已来、管弦雜曲將に数百曲、多く西涼樂を用う、鼓舞曲は多く龜茲樂を用う、其の曲度りて皆時に俗の知る所なり。）」とある。そして此の西涼樂について『旧唐書』は、「西涼樂者、後魏沮渠所得也。晋、宋末、中原喪乱、張軌據有河西、苻秦通涼州、旋復隔絶。（西涼樂とは、後魏沮渠氏を平げて得る所なり。晋、宋末、中原喪乱し、張軌據りて河西に有り、苻秦涼州に通じ、旋りて隔絶す。）」とある。乃ち当時の一般の人々の間にも西涼樂や龜茲樂がよく知られており、それは河西、涼州あたりからもたらされたものである。これについては、『随書・音楽志』にも、「西涼者、起苻氏之末、呂光、沮渠蒙遜等、变龜茲声為之、号為秦漢伎。魏太武既平河西得之、謂之西涼樂。至魏、周之際、遂謂之国伎。（西涼は、苻氏の末に起こる、呂光、沮渠蒙遜等、據りて涼州に有り、龜茲声を変じてこれを為り、号して秦漢伎と為す。魏の太武既に河西を平らげ之を得、之を西涼樂と謂う。魏、周の際に至り、遂に之を国伎と謂う。）と記している。また「今曲項琵琶、豎頭箜篌之徒、並出自西域、非華夏旧器。楊沢新声、神白馬之類、生於胡戎。胡戎歌非漢魏遺曲、故其樂器声調、悉与書史不同。（今の曲項の琵琶、豎頭の箜篌の徒は、並に西域自り出ず、華夏の旧器には非ず。楊沢新声、神白馬の類は胡戎に生まる。胡戎の歌は漢魏の遺曲に非ず、故に其の樂器声調、悉く書史と同じからず。）」とあり、つまり西涼樂は魏や周（北魏、北周、西魏、東魏）の時代には非常に盛んになったのであるが、それは龜茲の曲調を基にして作ったものであっても、ついには秦漢伎とか国伎と呼ばれるようにまでなった、またそれに使われる樂器は西域からもたらされたものであって、當時はやった歌曲も西域の異民族の地で生まれたものであつ

た、というのである。ここに言う胡戎とは西戎のことであり、西戎の楽について『旧唐書・音楽志』は、龜茲樂、疎勒樂、康國樂、安國樂、高唱樂の五つを挙げて、「此五国、西戎之樂なり」といっている。康国は今のサマルカンド付近で同書に、「康国樂舞、旋転如風俗、謂之胡旋舞（康国の樂舞は、旋転する事風俗の如し、之を胡旋舞と謂う）」とあり、『史記』に、「康居在大宛国西北可二千里、行国、与月氏大同俗。控弦者八九万人。与大宛隣国。国小、南羈事月氏、東羈事匈奴。（康居は大宛国の西北二千里ばかりにあり、行国（土着の国ではなく）にして、月氏と大いに俗を同じにす。弦を控く者八九万人。大宛と隣国なり。国小にして、南は月氏に羈事され、東は匈奴に羈事さる）」とある所の「康居」の事であると言う。安国はソグド族の建てた国で、今のプラハあたりにあったといわれる。『新唐書・西域』に、「安者、一曰布豁、又曰捕喝、元魏謂忸蜜者。東北至東安、西南至畢、皆百里所。西瀕烏澹河、治阿乱謐城、即康居小君長闕王故地。大城四十、小堡千余。募勇健者为柘羯。柘羯、猶中国言戰士也。武德時、遣使入朝。（安は、一に布豁と曰い、又捕喝と曰う、元魏は忸蜜と謂う。東北して東安にいたり、西南して畢に至る、皆百里の所なり。西は烏澹河に瀕し、阿乱謐城を治む、即ち康居小君長闕王の故地なり。大城四十、小堡千余、勇健者を募って柘羯と為す。柘羯は、猶中国の戰士を言うごときなり。武德の時、使いを遣わして入朝す。）」とあり、此の安国のことである。いずれも後のシルクロードに沿った地域である。武德は唐の高祖の初めの年号であるから唐以降は交流が盛んであったものと思われる。「西戎五国」の内上記二国以外は歴史上よく知られた国々である。高昌は現在のトルファンで今も高昌故城遺跡として残っている。龜茲は現在のクチャ（庫車）で前掲の史料で見た如く、音楽の面では当時長安に最も大きな影響を与えた国である。疎勒は現在のカシガル（喀什）であり以上三国は総てウイグル族を中心とした地域である。

Ⅳ

随以来、龜茲の樂が長安でどれほど盛んであったかは『隨書・音楽志』にも次のようにみえる。「龜茲者、起自呂光滅龜茲、因得其声。呂氏亡、其樂分散、後魏平中原、復獲之。其声後多变易。至随有西国龜茲、齐朝龜茲、土龜茲等、凡三部。開皇中、其器大盛於閭閻。時有曹妙達、王長通、李士衡、郭金樂、安進貴等、皆妙絶弦管、新声奇变、朝改暮易、持其音技、估街公王之間、拳時争相慕尚。高祖病之、謂群臣曰、「聞公等皆好新变、所奏無復正声、此不祥之大也。自家形国、化成人風、勿謂天下方然、公家自有風俗矣。存亡善惡、莫不繫之。樂感人深、事資和雅、公等对親賓宴飲、宜奏正声、声不正、何可使兒女聞也」帝雖有此勅、而竟不能救焉。（龜茲は、呂光龜茲を滅ぼして自り起こり、因って其の声を得る。呂氏亡び、其の樂分散するも、後魏中原を平らげ、復た之を獲る。其の声後に多く变易す。隨に至りて西国龜茲、齐朝龜茲、土龜茲等、凡そ三部あり。開皇中、其の器大いに閭閻に盛んなり。時に曹妙達、王長通、李士衡、郭金樂、案進貴等あり、皆妙絶弦管、新声奇变、朝改暮易、其の音技を持って公王の間に估街するに、時を挙げて争い相慕い尚ぶ。高祖これを病い、群臣に謂りて曰く、「聞公等皆新变を好み、奏する所復た正声無し、此れ不祥の大なるなり。家自り国を形づくり、化して人の風と成る、天下方に然りと謂う勿れ、公の家々自ずから風俗あり。善惡を存亡させるに、之に繫がざる莫し。樂は人に感じせしめること深く、事は和に資すること雅なり、公等親しき賓に対して宴飲するに、宜しく正声を奏すべし、声正しからざれば、何ぞ兒女に聞かす可きなりや。」帝此の勅有りと雖も、竟に救う能わざるなり。）」と。

それではこうした西域の樂舞はどんなものであったのか、使われた樂器や服裝については『旧唐書・音楽志』に、次のようにある。

高唱樂——二人舞で、服裝は白い袷に綾織りのチョッキ、赤い革靴、赤い革帯、紅い頭飾り。

楽器は腰鼓，羯鼓，鷄婁鼓，簫，横笛，箏，琵琶，五弦琵琶，銅製のチャルメラ，箜篌（堅琴）。

亀茲楽——演奏者は黒糸で織った布で作った頭巾，緋色の糸で織った布で作った長上着，綾織りのシャツ，緋色のズボン。四人舞，紅いはちまき，緋の上着，白い縁取りのズボン，黒い革靴。楽器は堅琴，琵琶，五弦琵琶，箏，横笛，簫，箏，毛貝鼓，都曇鼓，答臘鼓，腰鼓，羯鼓，鷄婁鼓，銅拔，貝。

疎勒楽——演奏者は黒糸で織った布で作った頭巾，白糸織りのズボン，錦の襟と袖口。二人舞，白い上着，錦の胴着，赤い革靴，赤い革帯，楽器は堅琴，琵琶，五弦琵琶，横笛，簫，箏，答臘鼓，腰鼓，羯鼓，鷄婁鼓。

康国楽——演奏者は黒糸織りの頭巾，緋色の糸で織った長衣，綾織りの襟。二人舞，緋色の上着，綾織りの襟のついた胴着，緑の綾布で襠（まち）をいれたズボン，赤い革の靴，白い縁取りのズボン。其の舞い方は，くるくると風のように回って舞う，俗に謂う胡旋舞である。楽器は笛，太鼓，銅拔（小振りのドラ）。安国楽——演奏者は黒糸織りの頭巾，綾織りの袖と襟，紫のジャンパーズボン，舞方は二人で，紫の上着，白い縁取りのズボン，赤い革の靴。楽器は琵琶，五弦琵琶，堅琴，簫，横笛，箏，正鼓，和鼓，銅拔，置き琴。

以上で解ることは，西戎の楽の演奏者達や舞方達の服装が非常にカラフルできらびやかだと言うことである。これは現在中央アジアから西アジアに住むトルコ系の民族，特にウイグル族の服装の華やかさを髣髴とさせる。また亀茲で使われている楽器には，編鐘，編磬等の大がかりなものは無く，すべて携帯便利で簡便なものばかりである。更に弦楽器，打楽器が其の中心を為している為に，これらによって奏でられるメロディーのリズムにはかなり速いテンポのものも多かったにちがいない。こうした要素が漢民族の異国情感をかき立て，それが長安での隆盛を引き起こし，長年にわたる流行を維持させることになったのである。

V

それでは以上見てきた西域の音楽とは具体的にはどういうものであったのかを。それを知る手がかりは，やはり史書の中に少しだけ見いだすことが出来る。『随書・音楽志』の胡戎歌について記した部分に次のような記述がある。「其歌曲有永世楽，解曲有万世豊，舞曲有于闐仏曲」即ち胡戎の曲には歌曲，解曲，舞曲の部分があることが解る。また同書で，高昌が煬帝に献じた聖明楽について述べたところがあり，「其歌曲有善善尼，解曲有婆伽兒，舞曲有小天，又有疎勒塩」とある。更に，「疎勒，歌曲有宄利死讓楽，舞曲有遠服，解曲有塩曲。」，「安国，歌曲有附薩単時，舞曲有末奚，解曲有居和祇。」とある。これら以外に「随書」には天竺楽，高麗楽等にも言い及んでいるが，それらには歌曲，舞曲についてしか述べられていない。即ち隋唐時期の西域の楽曲の特徴は，歌曲，解曲，舞曲の三つの部分から構成されていると言うことである。上記の楽曲の構成を表にまとめると次のようになる。

地域楽曲と構成曲種

楽種 曲種	高昌楽	疎勒楽	胡戎歌
歌曲	善善摩尼	宄利死讓楽	永世楽
解曲	婆伽兒	塩 曲	万世豊
舞曲	小 天	遠 服	于闐仏曲
不明	疎勒塩		

高昌楽の最下欄に書いた「疎勒塩」であるが，此の帰属がはっきりしない。先に挙げた此の部分の文脈から，舞曲の一つとして「小天」と同格にあるものとして書かれているとも考えられるが，もしそうなら，後文の「康国，——歌曲有戢殿農和正，舞曲有賀蘭鉢鼻始，末奚波地，農恵鉢鼻始，前拔地恵地等四曲。」とあるように，前部の「又有」は無いはずである。今一つの可能性は，此の文が全体的には亀茲楽の中に含まれている部分であるかのように見えているが，実は「亀茲」楽と並列されているものと考え

えられないかと言うことである。しかし実際は此の後文に独立して「疎勒」の項が建ててあるのでそれも否ということになる。と言うことは此の「疎勒塩」の語は上記の表の中のどの部分にも挿入する事が可能であるということになる。そこでもう一度此の表をよく見てみると、疎勒の解曲の部分に「塩曲」とある。他の所の書き方から考えて、「塩曲」が一つの曲名を表しているとは思われない。つまりこれは「塩」に関わる「曲」と言うことを表しているものと考えられる。例えばそれが「疎勒塩」なのではないかと思われるのである。言い換えると、疎勒楽では「解曲」のことを「塩曲」と言い、又それを「疎勒塩」と言ったのであろう。疎勒楽で「塩曲」と言われ、「——塩」と言われたと言うことは、西域諸地域の楽曲でもこれらの語が使われたと思われるが、いずれにせよ「解曲」の語を解明しなければならない。其の為には現代の西域楽曲、特に疎勒（カシガル）と関係が深いウイグル音楽を考察してみる必要がある。

VI

現在ウイグル族の間で最も愛され、最もよく歌われ踊られているのは、一大套曲と言われるムカム（木卡姆）である。ムカムはウイグル族特有の規模の大きい組曲で、今知られているのは、十二ムカム（カシガルムカム）、ハミ（哈密）ムカム、タラン（多朗）ムカム、イリ（伊犁）ムカムの四種である。ムカムはだいたい九世紀頃から発生し、十五世紀頃に完成したのではないかといわれている。ムカムについての研究は、周菁葆の、「シルクロード芸術研究」に詳しいので今それを参考にしながら、十二ムカムを例として考えて見よう。

十二ムカムは其の名の通り十二のムカム曲からできている。それぞれムカムは、「琼拉克曼」、「達斯坦」、「麦西熱甫」と言われる三つの部分からなっている。「琼拉克曼」は大曲の意味で自由なりズムで深く落ちついた優雅な調べのも

のである。「達斯坦」は叙事組曲の意味で抒情的でなめらかで、感情的な盛り上がりを持つメロディーによってできている。「麦西熱甫」は歌唱舞踏に適合した曲の運びのものである。今「琼拉克曼」の構造を見ると次のようである。

散序——太孜——太孜間奏曲——怒斯赫——怒斯赫間奏曲——小賽勒克——小賽勒克間奏曲——朱拉——賽乃姆——大賽勒克——帕西路——帕西路間奏曲——太喀特。

ここに言うそれぞれの名称は曲名ではなく、一つの曲位置に付けられた曲種の名称とでも言うものである。十二のムカムの内の一つのムカムの演奏に約二時間かかるとされているが。そうすると一つの曲種の演奏に、平均十分前後かかるということになる。

今此の構造をよく見ると、其の大まかな構造は、

曲——間奏曲——曲

ということになる。こうした基本の構造単位は、ムカムが生まれたかなり初期の段階からあったに違いない。此の構造が、歴史を踏むに従って増大してついには現在のような長大なものとなっていったのであろう。

随唐の西域音楽における、三つの構成要素、歌曲、解曲、舞曲は上記の基本構成の基となったものであろう。それから考えると、解曲とは恐らく間奏曲を意味していたものと考えられる。間奏曲は必ず次の曲への繋ぎであって、間奏曲で終わることはあり得ない。此の解曲こそが塩曲であり、「——塩」と呼ばれる曲種なのである。宋代に書かれた『容齋隨筆』には多くの「——塩」と名付けられた楽曲がある。これらは恐らく随唐時代にはやった西域民族音楽の間奏曲部分乃ち解曲部分が宋代に至るにしたがって、独立した一つの曲調となったものであろう。故に当時では「塩」が「吟、行、曲、引の類」と理解されるようになっていたものと思われる。

VII

唐代、張文成『朝野僉載』に記載されている「族塩」も恐らく此の、西域音楽の間奏曲に当たるものを意味しているものと考えられる。「族」には「民族」、此の場合は「西域異国の民族」という意味以外に、「滅族」「誅滅」の意味もある。此の場合は知微一族に対する誅滅、罰としての皆殺しと言う意味も付与されているであろう。但しそれは此の文の末尾の「族塩」について言えるのであって、前部の「族塩」についてではない。「麟徳」と言う年号は則天武后の称制よりも二十年も前のことである。よって此の時「百姓飲酒唱歌」したのはまだ知微一族誅滅の事件が起こるより前のことである。だから、「曲終而不尽者号为族塩」と言った「族塩」にはまだ皆殺しの意味は込められていない。「塩曲」は先に指摘したように「間奏曲」の意味で、「まだ先につづく」という意味だから、ちょうどそのころ巷で流行っていた、胡戎の楽の塩曲（間奏曲）のようであると言うことで「号为族塩」としたのである。末尾の「族塩」は知微の一件を踏まえているから、この場合の「族塩」の「族」は当然一族誅殺の意味が込められているであろう。つまり此の場合の「族塩」は、一族は皆殺しに会ったけれど、其の「小児七八歳」の子は残された為に、これから以降知微がしたようなことが何代となく繰り返されるであろうと言う意味をもふくめて、「其族塩之言、於斯応也」といっているのである。

ただ『唐書・五行志』のように、則天武后より二十年も前ではなく、「武后時、民飲酒謳歌」であるならば、前文の「族塩」にも「誅滅」の意味が込められていると考えても良いであろう。其の場合は「於斯応也」により迫真の意味があり、飲酒歌唱する「百姓」も、それを聞いて「族塩」だと評する人々も、ともに滂沱として流れる涙を禁じ得なかったにちがいない。

補

『朝野僉載』、第27話に次のような話がある。

竜朔以来、人唱歌名突厥塩。後周聖曆年中、差閻知微和匈奴，授三品春官尚書，送武延秀娶成默啜女，送金銀器物，錦綵衣裳以為礼聘，不可勝紀。突厥翻動，漢使並没，立知微為可汗，突厥塩之応。

竜朔（唐高宗の時の年号、前に出た麟徳より以前になる）以来、人唱歌して突厥塩と名付く。後周（則天武后称制の大周のこと）聖曆（武則天の時の年号）年中、閻知微を差わして匈奴と和せんとし、三品春官尚書を授け、武延秀を送りて娶りて默啜の女とせんとし、金銀器物、錦綵衣裳を送りて以て礼聘と為山とするも、紀するに勝えるべからず。突厥翻動し、漢の使い並に没せしめ、知微を立てて可汗とす、突厥塩之に応ず。）

此の話も上に述べてきたものとはほぼ同様に理解できる。即ち、武則天以前、唐高宗の頃から人々は突厥塩と名付けられた歌を謳っていたが、此の歌は解曲であるから、次の歌が必ず起こるに違いない、つまり突厥について何かが起こるのではないかと懸念されていたが、案の定、突厥が寝返って、漢の使者を殺し知微を可汗に立てる等という大それたことを引き起こした。ということなのである。それが「突厥塩之応」の意味であろう。

（1998年7月21日受理）